

# 「おうちプリント」 「おもしろい」 「おもしろい」 「おもしろい」 「おもしろい」

町のお店編

よいお店プリントにはツーカーの仲の「なじみの写真屋」が欠かれない。特に関西の店には客とどっぷりつきあう写真文化が根づいているという。

の店主、高岡ヒロカズさんは、印刷会社で製版フィルムとの現像に携わりながら、カメラマンとしてスタジオの運営を行っていたという経歴を持つ。

一念発起、写真店を開いたの



いい店には口コミで遠方からも客が集まる  
繁華街からは離れており、近所の人しか知らないような立地にもかかわらず、ウワサを聞きつけて京都や奈良、岡山からも客が来る

は、あの阪神大震災の2年前の1993年だった。「店の真下に活断層が通っていた」が、奇跡的に建物は無事だった。

住宅地のど真ん中という立地でありながら、遠くは和歌山や京都、奈良からも客がやって来る。ちなみに、店名の「レディー」は、貴婦人のLadyではなく、Ready Go! (よい、ドン!)のレディーだ。

## よい作品は まず2L判にプリント

デジタル写真のプリントの場合、撮影したままのSDカードを持ってくる客が多いという。高岡さんはパソコンで画像を開き、客と一緒に写真を選び、「いいなど思うものは、ここで全部2L判に



プリント前の「ひと手間」  
「プリント前のひと手間」で作品の倍打ちが変わるの「写真」と語る高岡さん

プリントしてもらおう」。店頭にはミニラボ機(172号下の写真)があり、即プリント。

機械まかせでもプリントできるのだが、微妙なカラーバランスや濃度など、一枚一枚調整しながらプリントを仕上げる。だから「手間ばかりかかって、たいしてもうからない」と笑う。

2L判といえども手間を惜しまないのは「ひと手間かけたら、プリントのよさみだいなものが伝わる」からだ。「2L判に伸ばしてあれば、もし撮影データをなくしたとしてもプリントを原版にしてプリントできる」という理由もある。実は、デジタル時代で



独自の「ハンコ」を写真屋に  
ラボに指示も明確に伝えるために考案し、その後、一般に広まったハンコ

も究極の保存法はプリント保管だという人は少なくない。

大阪のフジカラープリントの工場が閉鎖され、東京工場へ統合された現在、四切以上の注文は、フィルム、デジタルとも東京に送られてプリントされる。とはいっても高岡さんは、黙って任せているわけではない。

客が「もつちよつと何とかならないの？」という場合は、それをプリントのオペレーターに直接伝える。「撮影者が何を訴えたいか、プリントを伝えるとオペレーターもプリントしやすい」からだ。その指示は事前に客にも説明するので、「お客さんからの返品はない

です」と言い切る。

「でも、僕が見て、ラボへ送り返して焼き直しはあります」ということで、フォト・レディーでは事前に納期を伝えることはなく、プリントが仕上がってから電子メールや電話で客に連絡するスタイルをとっている。

フィルムからのプリントでも、微妙にシアンの色(187頁参照)を足したり、マゼンタの色を足したりということはある。「だから、その程度のレタッチ処理は構わないけれど、明らかに大きく手に入った画像はよその店でプリントしてください」とはっきり伝えて

いる。画像を修整したほうがよい場合は、撮影したままの画像を見ながら「この赤のにこりを抜いてやれば主題に視点がいく」というような説明をし、客に理解してもらう努力を惜しまない。

「自分で手間ひまかけて何枚も焼き直すのなら、店にまかせてくれたらいいんです。写真というのは撮ってナンボ。ぜひ撮るほうに熱中してほしい」